

生活科における知的な気づきを深める 学習指導の在り方に関する研究

－「繰り返し対象とかかわる活動」をとおして－

大船渡市立立根小学校 教諭 佐々木 康人

I 研究目的

小学校生活科においては、具体的な活動や体験をとおして、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養うことを目標としている。

しかし、児童の実態をみると、楽しさや喜びを感じながら活動に取り組んではいるものの、単に活動するだけにとどまっていて、その活動が自分にとってどんな意味や価値があるのかを考えるとろまで至っているとは思われない。これは、これまでの指導において、児童が活動のなかで生まれる知的な気づきを自覚し、自分自身や自分の生活と結び付けて考えるための手だてが十分でなかったことによると考えられる。

このような状況を改善していくためには、知的な気づきを交流し合うことのできる場を取り入れた「繰り返し対象とかかわる活動」を行うことによって、その活動が自分にとってどんな意味や価値があるのかを考えさせて、知的な気づきを深めていく必要がある。

そこで、この研究は、「繰り返し対象とかかわる活動」をとおして知的な気づきを深める学習指導の在り方を明らかにし、小学校生活科の学習指導の充実に役立てようとするものである。

II 研究仮説

生活科の学習指導において、知的な気づきを交流し合うことのできる場を取り入れた「繰り返し対象とかかわる活動」を以下のように行えば、その活動が自分にとってどんな意味や価値があるのかを考えるようになり、知的な気づきが深まるであろう。

- (1) 自他の知的な気づきの違いを比較させたり、共通点を関連づけたりさせる。
- (2) 対象への新たな課題や見通しをもたせる。

III 研究の内容と方法

1 研究の内容

- (1) 生活科における知的な気づきを深める学習指導の在り方に関する基本構想の立案
- (2) 生活科における知的な気づきを深める学習指導の在り方に関する実態調査及び調査結果の分析と考察
- (3) 「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案の作成
- (4) 授業実践及び実践結果の分析と考察
- (5) 生活科における知的な気づきを深める学習指導の在り方のまとめ

2 研究の方法

(1) 文献法 (2) 質問紙法 (3) 授業実践 (4) 記録法

3 授業実践の対象 大船渡市立立根小学校 第1学年 1学級 (男子14名 女子8名 計22名)

IV 研究結果の分析と考察

1 小学校生活科における知的な気付きを深める学習指導の在り方に関する基本構想

(1) 小学校生活科における知的な気付きを深めることに関する基本的な考え方

知的な気付きとは、児童が自らの思いや願いをもって活動に取り組んだとき、驚いたり、感動したり、不思議に思ったり、自ら考えたりなどしながら実感をともなって得られた心の動きであるにとらえる。それは、児童が次の活動をするのに役立てたり、生かしたりしていけるような気付きを指している。

本研究では、この知的な気付きを深めるための構成要素を「はたらきかける意識」「振り返る意識」「高める意識」の三つと考える。「はたらきかける意識」とは、自らの思いや願いを対象にはたらきかけようとする意識であり、その意識の高まりによって情緒的な気付きが生まれると考える。「振り返る意識」とは、対象へのはたらきかけを振り返ろうとする意識であり、その意識の高まりによって形成的な気付きが生まれる。「高める意識」とは、対象へのはたらきかけを高めようとする意識であり、その意識の高まりによって発展的な気付きが生まれる。この三つの意識は段階的に高まっていくものであり、それぞれの意識が高まっていくことにより、知的な気付きが深まると考える。これらの構成要素の意味とそれぞれの知的な気付きの段階と内容をまとめたものが、次の【表-1】である。

生活科の学習は、児童が自分とのかかわりのなかで、身近な人々、社会及び自然に直接はたらきかける活動をめぐって展開される。そこでは、児童が、何のために活動しているのかといった意味づけや、その活動が自分にとってどのような有用性をもつのかといった価値づけを、実感として感じ取ることが必要である。知的な気付きを深めることで、児童は、

【表-1】知的な気付きを深めるための構成要素

構成要素	構成要素の意味	知的な気付きの段階と内容
はたらきかける意識	自らの思いや願いを対象にはたらきかけようとする意識	【情緒的な気付き】 思いや願いをもって対象とかかわるときに生まれる感覚的で直感的な気付き 「～してみたいな」
		【形成的な気付き】 情緒的な気付きをもって対象とのかかわりを深めていくときに生まれる児童自らの思考に基づく気付き 「どうして～なのかな」「～したらできたよ」
振り返る意識	対象へのはたらきかけを振り返ろうとする意識	【発展的な気付き】 形成的な気付きをもって対象とのかかわりを深めていくときに生まれる児童自らの創造的な思考に基づく気付き 「ほかのものではどうか」「こんどは～してみようかな」
高める意識	対象へのはたらきかけを高めようとする意識	

自分を取りまく人々や社会及び自然が自分自身にとってもつ意味や価値に気付き、身の回りにあるものをもう一度見直し、切実な問題意識をもってはたらきかけをすることができると考える。

以上のことから本研究で考える知的な気付きが深まった児童の姿を「学習活動が自分にとってどんな意味や価値があるのかを考え、はたらきかけることのできる児童」と、とらえた。

(2) 「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れる意義

児童が思いや願いをもって対象とかかわったとき、知的な気付きが生まれる。その知的な気付きは、次の活動への新たな思いや願いとなり、それらの思いや願いが対象に向けられたとき、さらに深まりのある知的な気付きが生まれる。「繰り返し対象とかかわる活動」は、このような知的な気付きを深める一連の活動である。

「繰り返し対象とかかわる活動」を行うことは、知的な気づきを深めるうえで、次のような点において意義があると考えられる。

ア 対象との一度きりのかかわりでは、児童の知的な気づきは情緒的なもので終わりがちである。

「繰り返し対象とかかわる活動」は、児童に試行錯誤の機会を与え、対象とかかわりて生まれた知的な気づきを次の活動に生かすことができる。それは対象へのかかわりを深め、同時に児童の知的な気づきを発展的なものにする。

イ 児童が対象とするものには、変化するものもある。児童は繰り返し対象とかかわることによって、その変化を体験することができ、知的な気づきを深まりのあるものにしていく。

(3) 「繰り返し対象とかかわる活動」の展開

本研究では、知的な気づきを深めるため、交流し合う場を設定し、次の活動を取り入れることにより、「繰り返し対象とかかわる活動」を行うこととする。

ア 知的な気づきを比較したり関連づけたりする活動

これは、児童が知的な気づきを書き留めたカードをもとにしながら、それぞれの知的な気づきの違いを比較したり共通点を関連づけたりする活動である。この活動により、児童は互いの知的な気づきのよさを認識し、同时对象とかかわり方を視点を改めて見直し、対象とかかわり方を広げ、自分の思いや願いをふくらませていくことができる。と考える。

イ 対象へのかかわりの新たな課題や見通しをもつ活動

これは、児童が互いの知的な気づきを比較したり関連づけたりしながら自分の思いや願いをふくらませたことをもとにして、対象とかかわり方に新たな課題や見通しをもち、それをカードに書き留める活動である。この活動により児童は対象とかかわりに、新たな目的意識をもちながら活動することができる。と考える。

(4) 生活科における知的な気づきを深める学習指導の在り方に関する基本構想図

これまで述べてきたことをもとに、知的な気づきを深める学習指導の在り方についての基本構想図を【図-1】のように作成した。

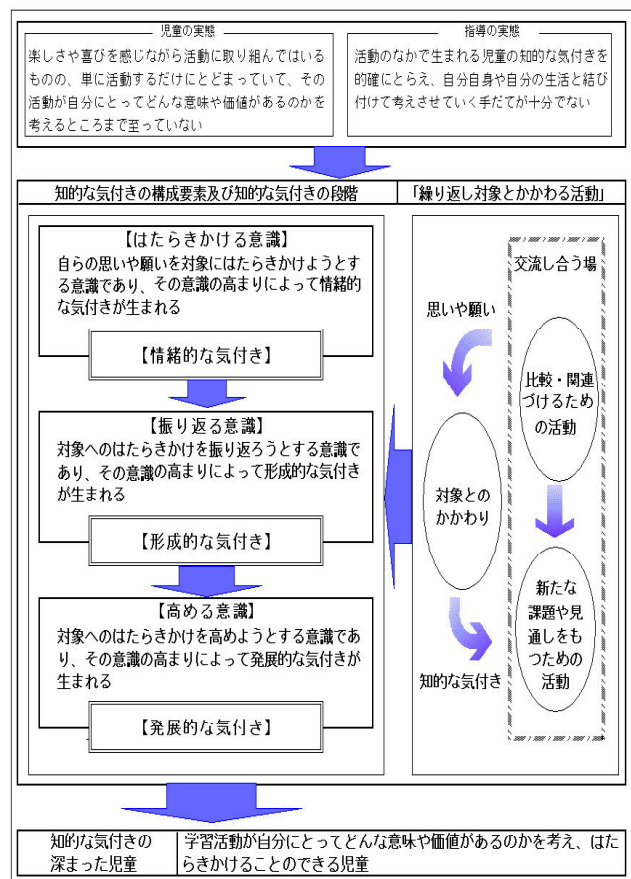
2 「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案

(1) 「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案作成の観点

基本構想及び実態調査の分析（本資料では省略）から明らかになった課題を解決するために、次の観点から「繰り返し対象とかかわる活動」の指導試案を作成することとする。

ア 交流し合う場において、個々の児童が知的な気づきを無理なく表現できるよう、カードの種類や書く時間の工夫を図る。

イ 交流し合う場において、児童が互いの知的な気づきを比較したり関連づけたりしやすいよう、焦点を絞った話し合いの工夫を図る。



【図-1】生活科における知的な気づきを深める学習指導の在り方に関する基本構想図

(2) 「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案

指導試案作成の観点に基づき、「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案を次のように考えた。

ア 知的な気づきを表出する活動の手だて

単元の指導過程を、「出会う」「深める」「まとめる」の3段階とし、「深める」段階のなかで、交流し合う場を取り入れた「繰り返し対象とかかわる活動」を行っていく。

交流し合う場においては、知的な気づきの違いを比較したり共通点を関連づけたりするため、また、対象とかかわる活動に課題や見通しをもたせるため、活動の前後に個々の気づき、思いや願いをカードにまとめさせる。

カードは、個々の児童が知的な気づきを無理なく表現できるよう、【表-2】のように5種類用意しておく。カードはB5判程度のものを用意し、上半分に簡単な絵を、下半分に2文程度の簡単な記述ができるようにしておく。また、1枚のカードに書く時間は15分程度設定する。

イ 交流し合う場における話し合いの工夫

(ア) 知的な気づきの違いの比較や共通点の関連づけ

カードの記述内容を単元のねらいに基づいて分類するとともに、相反する知的な気づきを抽出し、話し合いの焦点化を図る。また、抽出した相反する知的な気づきについて、それぞれの立場から対象とのかかわりを振り返らせ自分の考えを語らせる。

(イ) 新たな課題や見通し

話し合いのなかから得た考え方を新たな課題や見通しとして取り上げ、対象への思いや願いをふくらませる。

(ウ) 個への配慮

自分の考えを他の児童の前で話すことができない傾向にある児童には、指導者が質問する形をとる。

ウ 「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案の作成

【図-2】は、これまで述べてきたことをもとに作成した「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案である。

(3) 検証計画

指導実践をとおして指導試案の妥当性をみるために、【表-3】のような検証計画を作成した。(知的な気づきの深まりを分類するための基準は本資料では省略)

【表-2】カードの種類と記述内容及びカードに表出される知的な気づき

	カードの種類	カードの記述内容	知的な気づき
出会う	どきどきカード	思いや願い 「～してみたいな」	情緒的な気づき
深める	はてなカード	疑問・問題点 「どうして～なのかな」	形成的な気づき
	びっくりカード	発見 「～したらできたよ」	情緒的な気づき
まとめる	わくわくカード	思いや願い 「次は～してみようかな」	形成的な気づき
	すごいねカード	満足感 「～できるようになったよ」	形成的な気づき

過程	学 習 活 動	交流し合う場における話し合いの工夫と指導上の留意点
出会う	【対象との出会い】 ○本単元の活動の内容を理解する ○対象への思いや願いを「どきどきカード」に記入する	児童の興味や関心、期待感が生まれるような出会いを工夫する
深める	【交流し合う場1】 ○「どきどきカード」をもとに対象への個々の思いや願いについて話し合う	①知的な気づきの違いの比較や共通点の関連づけ ・児童がカードに記入した知的な気づきを分類するとともに、相反する知的な気づきを抽出する ・抽出した知的な気づきを提示し、それについての考えを、対象とのかかわりを振り返りながら語らせる ②対象への新たな課題や見通し ・話し合いから導かれた考え方を対象とのかかわり方の新たな方向性としながら、個々の児童の思いや願いをふくらませる
	【対象とかかわる1】 ○個々の思いや願いをもとに対象にはたらきかける ○対象とのかかわりを振り返り、疑問点や問題点、新たな発見を「はてなカード」や「びっくりカード」に記入する	
	【交流し合う場2】 ○「はてなカード」や「びっくりカード」をもとに個々の知的な気づきについて話し合う	
まとめる	【対象とかかわる2】 ○交流し合う場で話し合ったことをもとに、対象への新たな思いや願いを「わくわくカード」に記入する ○個々の思いや願いをもとに対象にはたらきかける ○対象とのかかわりを振り返り、疑問点や問題点、新たな発見を「はてなカード」や「びっくりカード」に記入する	
	【交流し合う場3】 ○「はてなカード」や「びっくりカード」をもとに個々の知的な気づきについて話し合う	
まとめる	【活動の振り返り】 ○これまでの活動を振り返り、楽しかったことを話し合う ○「よくがんばったな」と思うことを、自分への賞状という形で「すごいねカード」に記入する	これまでの活動を振り返り、互いのよさを認め合う雰囲気づくりをする

【図-2】「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案

【表-3】検証計画の概要

検証項目	検証内容	処理の方法
知的な気づきの深まりについての意識の変容の状況	「はたらきかける意識」	知的な気づきの深まりについての三つの意識に対応した設問により、指導実践の事前と事後の変容について比較・分析する
学習活動の各段階における抽出グループの知的な気づきの深まりについての状況	「振り返る意識」 「高める意識」	交流し合う場や対象とかかわる活動における児童の発言や行動の記録、カードの記述内容から、情緒的な気づき、形成的な気づき、発展的な気づきのそれぞれを取り上げ分析する

- 4 授業実践及び実践結果の分析と考察
- (1) 指導試案に基づく指導計画 (省略)
 - (2) 授業実践の概要

ア 授業実践の概要

指導試案に基づいて作成した指導計画にしたがい、【資料-1】のように授業実践を行った。
 は児童が記述したカードのなかから交流し合う場で取り上げた内容、
 は児童の発言、
 は指導者の発問である。

【資料-1】授業実践の概要

【 出 会 う 】

1 森の動物たちから、お手紙と宅配便が届いたことを知らせる。

もりのおうち
がほしいな



きのみやはっぱが
たくさんある おう
ちがいいな



みんなのいえに
あるものをつかえ
ないかな



けがをしないように
してね



どんなのしいおう
ちができる
のかな





これ、ぜったい材料だ



おうちに
あるよ。
ペットボトル

2 宅配便の荷物の中身が、自分たちの身の回りの自然や身近にある物であることを確認する。

3 自分が作ってみたい「もりのおうち」を「どきどきカード」にまとめ、グループごとに発表し合う。



ストーブを作りたいです

➡



【みんなの前で発表する】

【どきどきカードにまとめる】 【みんなの前で発表する】

【 交 流 し 合 う 場 1 】

1 どきどきカードの記述内容をもとに、個々の児童に生まれた気づきの違いの比較や共通点の関連づけを行う。

「もりのおうち」には、なにがあればいいんだろう？

玄関

えんとつ

↔

家具

ストーブ

↔

木の实

構造

生活用品

装飾



【「交流し合う場」の様子】

2 材料や作り方について新たな課題や見通しをもつ。

紙に描いて貼る

窓はね、穴をあければいいんだ

どうやって作ればいいんだろう？

全部つなげたら大きくなるよ

木の枝を使う

【 対 象 と か か わ る 1 】

1 対象とかかわる。



【段ボール箱を組み立てる】



【段ボールをはりつける】



【形ができあがってきた】

2 「はてなカード」や「びっくりカード」にまとめる。

不思議に思ったことや、困ったこと、みんなから教えてもらいたいことは、「はてなカード」に・・・

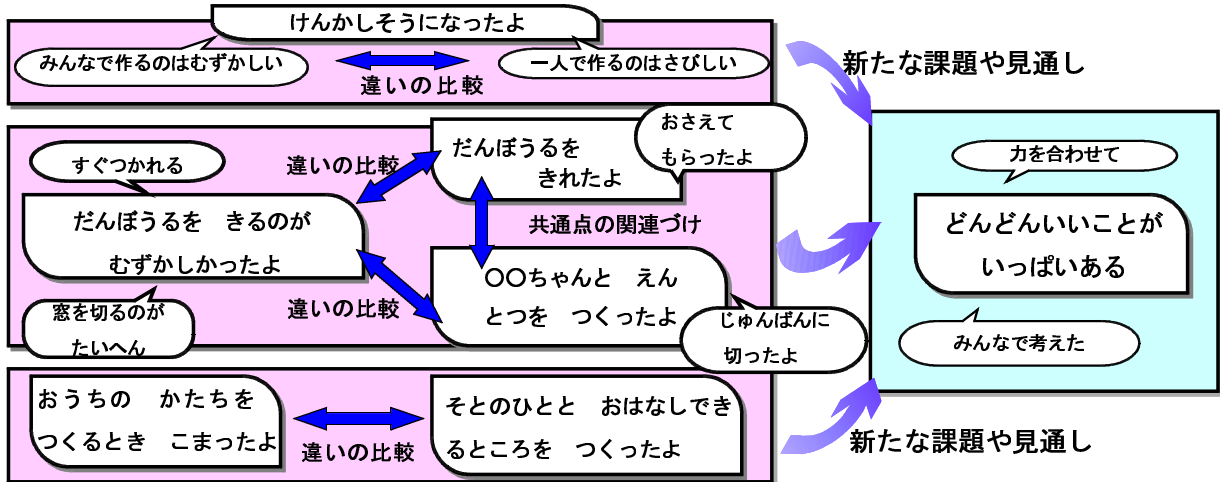


初めて分かったことや、みんなに教えてあげたいことは「びっくりカード」に・・・

- 5 -

【 交流し合う場 2 】

- 1 「どきどきカード」の記述内容をもとに、気付きの違いの比較や共通点の関連づけを行う。
- 2 「もりのおうち作り」に新たな課題や見通しをもつ



【 対象とかかわる 2 】

- 1 今日の活動への思いや願いを「わくわくカード」にまとめる。
- 2 対象とかかわる。



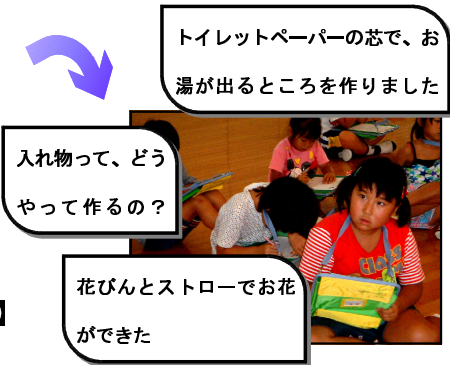
【棚を作る】



【煙突に穴をあける】



【ジュースが出るよ】



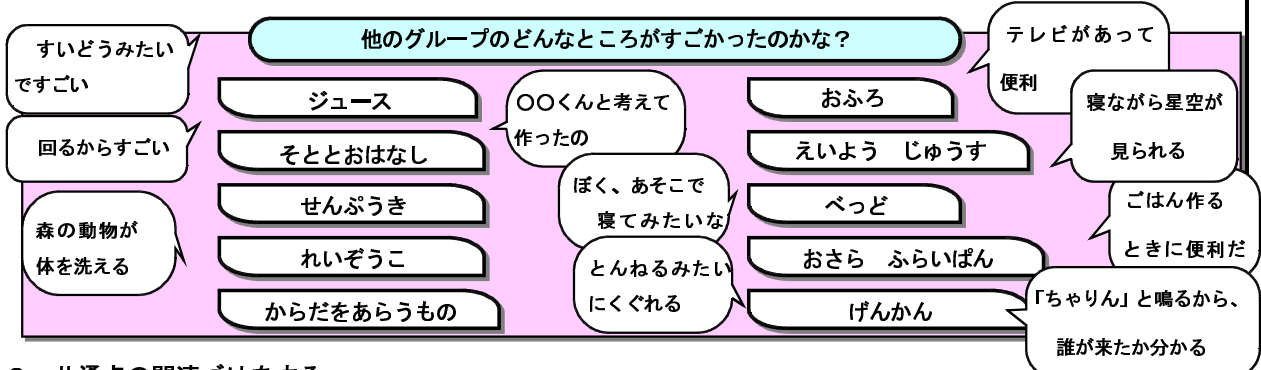
- 3 「はてなカード」や「びっくりカード」にまとめる。

【 交流し合う場 3 】

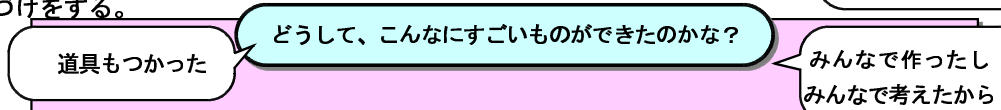
- 1 互いのグループの「もりのおうち」を訪問し合い、気付きの違いを比較する。



- 2 「びっくりカード」の記述内容をもとに気付きの違いを比較する。



- 3 共通点の関連づけをする。



4 課題や見直しをもつ。

これで「もりのおうち」はできあがりかな？

えっ!? まだだよ

葉っぱも木の実も

飾りつけてない!

どこに取りに行く?

なかにある物も
もっと作りたい

【 対象とかかわる3 】

1 草や木の実を取りに出かける。

ススキもつかえるかな?

栗は何に
つかおうか?





2 「わくわくカード」にまとめる。

コスモスの花もど
っていうこか?




3 グループごとに「もりのおうち」を作る。

ヤツデの葉は
どうしようか?

ナナカマドの
実を並べた




4 「びっくりカード」にまとめる。

【 対象とかかわる4 】

1 森の動物たちから手紙が届いたことを知らせる。

いちねんいちくみの みなさん。もりのおうち ありがとう。
たのしくて すごいおうちができて とってもうれしいです。
もりはいま あきのじゅんぴです。すこし さむくなってきたので
そろそろもりのおうちを とりにいけます。
ほんとうにほんとうに ありがとう。
—もりのどうぶつより—


まだ
作りたい

「もりのおうち」
で遊びたい

あつ、
道路だ!

つなげれ
ばね

友達のおうちに
遊びに行ける!



2 「もりのおうち」をつなげて、みんなで
ジャンケンゲームをして遊ぶ。

【 まとめる 】

1 本単元「もりのおうちがほしいな」の活動を、対象と自分とのかかわりから振り返る。

どんなことが楽しかったかな?

みんなと 木の実を取りに
行ったのが 楽しい

みんなで作るのが 楽しかった

もし一人で作ったらどうだったかな?

一人だとできないことがある

いろいろ考えられない

2 振り返ったことを、自分への賞状という形で「すごいねカード」にまとめる。

みんなに せんぼうき
をほめられたよ。いい
きもち。

じぶんで あたまをつ
かって げんかんを
とんねるに しました。


みんなで かんがえた
ら すごいおうちが
つくれたよ。

ぼく じゅうすがでて
くるきかいを はつめ
いしたんだ。

みんなで てえぶるを
つくったのが たのし
かったです。

まらかすや えんとつ
や てれびや でんぱ。
いっぱいかんがえたな。

すごいねカード
さん



【すごいねカード】

(3) 授業実践の分析と考察

ア 知的な気付きの深まりについての意識の変容の状況

知的な気付きの深まりについての三つの意識に対応した設問により、指導実践の事前と事後の変容について比較・分析した。【表-4】は、その結果をまとめたものである。

全体的な傾向としては、「はたらきかける意識」「振り返る意識」「高める意識」のいずれについても、事前調査の時点でプラス反応が多く見られたため、事前と事後の意識には大きな変容が見られなかった。

これは、調査の設問が第1学年の児童にとって、十分に理解できない内容であったことが大きな要因であり、第1学年の児童を研究の対象とするならば、その発達段階を考えた設問内容の工夫が必要であったと考える。また、第1学年の児童に対して質問紙法を研究の方法として取り上げ、児童の意識の実態や指導実践をとおしての意識の変容について調査しようとしたことについても課題の残るところである。

イ 抽出グループにおける知的な気付きの深まりの状況についての分析と考察

検証計画に基づいて、抽出グループにおける知的な気付きの深まりの状況についての分析と考察を行った。【資料-2】はB児の知的な気付きの深まりの状況についての分析と考察である。(A児、C児、D児については本資料では省略)

抽出グループについては、あらかじめ「材料を工夫して使うこと」「友達と楽しく遊ぶこと」という、本単元の目標にかかわる二つの点について、それを得意としている児童、得意としていない児童のいるグループを選んだ。

【資料-2】抽出児Bの知的な気付きの深まりの状況

段階	深め			まとめ
	対象とかかわる1	対象とかかわる2	対象とかかわる3	
情	① ②	① ④ ⑧ ⑨	⑦ ⑧	①②③④
形	③ ④ ⑤ ⑥ ⑧ ⑨ ⑫ ⑬ ⑮	① ④ ⑤ ⑧ ⑨ ⑫ ⑬ ⑮	① ③ ⑪	
発	⑦ ⑮ ⑯	② ⑥ ⑦ ⑩ ⑫ ⑬ ⑮	② ⑥ ⑦ ⑧ ⑩	

	活動の様子	知的な気付きの内容	知的な気付きの内容についての分析と考察
対象とかかわる2	① 「わくわくカード」 今回は入れ物を作る。木の実を入れるよ。	・B児は「対象とかかわる1」の⑯で「材料に手を加えると楽しい物ができる」という気付きをもとにしながら、棚を作っている。①の記述内容は、⑯の気付きから生まれた新たな情緒的な気付きであると考えられる。	・「対象とかかわる1」で作ったストーブに、材料の構造的な特徴に目を向けながら、さらに工夫を加えようとしている。
	② ストーブの煙突の先にボンドで丸いトレーを貼り付ける。丸いトレーの引っ張りや煙突の穴をうまく組み合わせて、貼り付けている。	② 煙突の先には傘みたいなものがついていて、これを使ってもうまくできないかな。	・③の様子から、B児が自分の気付きをもとに作ったストーブに満足感をもちていると考えられる。
	③ トレーをボンドで貼りつけたことを他の仲間に知らせている。	④ どうして、こんなことするのか。私が使おうとしていたのに、	・④が、⑤や⑥へと深まっていったのは、交流し合う場をおいて、①(「みんなで作るとうれしい!」)や②(「みんなで作るとうまくできる!」)の気付きが生まれてきたためではないかと考える。
	④ D児が段ボールを切っていることに気付き、驚いている。他のものに使うつもりでいたらしい。	⑤ 力を合わせて作るんだって。	・⑦は⑥の気付きの延長であると考えられる。
	⑤ 4人で話し合いを始め、結局、その段ボールで風呂場を作ることになった。	⑥ みんなと話し合いながら作るとういかな。	・⑧は①の記述をもとに対象とかかわっている活動であると考えられる。
	⑥ D児、A児と一緒に風呂場をつくる。	⑦ みんなと相談しながらみんなで作れば、もっと楽しいものができそうだな。	・⑨は、森の動物たちにとって便利なものを作りたいという、新たな情緒的な気付きである。⑦の気付きをもとにして生まれたと考えられる。
	⑦ C児が持ってきた厚紙の使い道をD児と話し合ったり、何をストーブにくべたらいいか、D児に声をかけている。	⑧ 棚を少し直してみようかな。	・⑩は、「対象とかかわる1」の発展的な気付き⑩(「材料に手を加えると楽しい物ができる!」)が、⑨の情緒的な気付き(「お風呂のシャンプーや棚を作りたい!」)と結びついて生まれた気付きであると考えられる。
	⑧ 前時に段ボールの板とトイレペーパーの芯で作った棚を手直ししている。この棚はその後、森の動物の食べ物を入れる棚となった。	⑨ 森の動物がお風呂に入るときに使うシャンプーがほしいな。それを入れる棚も作るうかな。	
	⑨ 森の動物たちが喜ぶものになろうと提案し、森の動物の風呂場としていた場所に棚を作り始める。作った棚に、ペットボトルやプラスチック容器、ポリワレンで作った体を洗う道具などをならべている。洗面用具に見立てている。	⑩ ランプがあると便利かな。何を使って作るうかな。ランプだから、光って見えるようにしたいな。	
	⑩ ペットボトルで携帯用のランプを作っている。ランプの中にオレンジ色の紙を小さく切ったものが詰めてある。取っ手はストローでできている。		

【表-4】 知的な気付きの深まりについての意識の変容状況

N = 22 (単位:人)

構成要素	事後		+	-
	事前	+		
1 はたらきかける意識	+	21	0	
	-	1	0	
2 振り返る意識	+	18	0	
	-	4	0	
3 高める意識	+	14	1	
	-	5	2	

「注」1 調査はア・イ・ウ・エの四肢選択で実施し、ア・イはプラス反応、ウ・エはマイナス反応とし、ア・エを各々の強い反応とした。

「注」2 網がけはマイナスからプラスへ、プラスからマイナスへと、それぞれ変容がみられたところである。

<p>⑪ 作り上げたランプをもって、「もりのおうち」の周りを歩き回る。他のグループの児童にも自慢げに見せている。</p> <p>⑫ ストープの上に、紙の筒が数本立ててあるのに気づき、驚きの声を上げながらそれを取り始める。(4人で笑い合っている)</p> <p>⑬ 3人にランプの作り方を説明し始める。</p> <p>⑭ 自分が家から持ってきた材料(ストロー・色紙・パスタの入れ物)を並べ、それを自由に使うよう同じグループの仲間や他のグループにしきりに声をかけている。 ※ 他のグループの児童が色紙をもらいにくる。その児童は、そのお礼にと、後でペットボトルやヤツデの葉をおいていった。</p> <p>⑮ C児の作業を手伝いながら、緑のスズランテープだからメロンジュースにしたらどうかと話している。(C児は葉にした)</p> <p>⑯ 紙やストローを切ったものを、アイスカップに詰め、それを風呂場の棚に並べている。</p> <p>⑰ 棚の上に葉っぱを飾ったり、棚の中にパスタの入れ物をきれいに並べたりしている。パスタの入れ物には、次時に木の実をつめた。</p> <p>⑱ 水玉模様の敷物に見立てて床に敷いておいた紙(たくさんの穴があいている)をしばらく見ていたが、それを集めて「もりのおうち」の壁の上に並べはじめる。</p> <p>「はてなカード」 ⑲ わたしは、穴のあいた紙をどうすればいいのかなと思います。 「びっくりカード」 ⑳ ペットボトルにいろいろな物を入れると葉ができるよ。</p>	<p>⑪ みんな見て。このランプすごいでしょ。</p> <p>⑬ みんなにもランプの作り方を教えてあげようかな。</p> <p>⑭ 私の材料をあげれば、みんなで楽しくできるし、みんなでもっとすごいものを作れるかもしれないよ。</p> <p>⑮ Cちゃんも私の方法で作りたいんだな。うれしいな。私も手伝ってあげようかな。</p> <p>⑯ お風呂の棚に、もっといろいろな物を入れたいな。</p> <p>⑰ 「もりのおうち」だから、葉っぱもほしいかな。こっちは食べ物を入れる棚にしようかな。</p> <p>⑱ これ、何かに使えないかな。水玉模様のおうちがいて、みんな言ってたな。壁の上に載せてみようかな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ⑪の様子から、B児が自分の気づきをもとに作り上げたことに満足感をもっていると考えられる。 ⑫の様子から、みんなで楽しく作ろうという雰囲気、4人の中に生まれていると考えられる。④の様子のようなとげとげしさはない。 ⑬は⑩の気づき(「並べて見えるランプ」)を友達にも広めたいという発展的な気づきであると考えられる。 ⑭は⑦や⑩の気づきが結びついて生まれた気づきであると考えられる。また、その気づきを、他のグループにも広げようとしている。 ⑮の気づきは⑩の気づきの延長であると考えられる。 ⑯の気づきは①の情緒的な気づき(「今度はいれ物を作る。木の葉を入れるよ。」)が深まった、形成的な気づきであると考えられる。 ⑰は、これまで作ってきた棚に、「身近な自然のものを生かそう」としたものであり、①や⑧の気づきが、形成的な気づきに深まったものであると考えられる。 ⑱の集合の合図がかかっても、なかなか戻ろうとしない。穴のあいた紙をもって、うろうろしている。 <p>⑱の活動の様子と⑲の記述から、B児が対象への思いや願いを残したまま活動を終えていたと考えられる。</p> <p>⑳は、自分の気づきをもとに、森の動物の葉を作ったC児の活動について記述したものである。自分の気づきのよさが友達にも広まったことに対する満足感があると考える。</p>
<p>抽出児Bの知的な気づきの深まりについての分析と考察</p> <p>○ ⑬⑭⑮の活動の様子から、交流し合う場で生まれた「みんなで考えれば」「みんなで力を合わせれば」という課題や見通しを、B児が対象とのかかわりのなかで生かそうとしていると考えられる。</p> <p>○ ⑲では、⑯の活動についての思いが残ってしまったことを記述している。また、⑳の「びっくりカード」では、活動前の「わくわくカード」の内容と関連づけるとともに、他の児童にも広がった自分の気づきのよさを記述している。このような記述は、「対象とかかわる1」での「はてなカード」(「何も書くことがないよ」)には見られなかったことである。このことから、B児が繰り返し対象とのかかわることをとおして、自分の思いや願いを膨らませるとともに、活動後には対象とのかかわりを振り返るようになってきていると考えられる。</p> <p>○ 「出会う」段階で生まれた②(「すべりたいをつくりたい」)などのように、情緒的な気づきそのままの段階で残ってしまった場合もある。②の気づきは「遊びを工夫する」や「友達と遊ぶ」といった、本単元のねらいにかかわる大切な気づきである。交流し合う場で、個々の気づきのよさを、十分に取り上げ、深めたり広げたりすることができていなかったと考えられる。</p>		

ウ 抽出グループにおける知的な気づきの段階別の分析と考察

三つの構成要素について検証するため、抽出児4名の知的な気づきを段階別に分析した。その結果、次のようなことが明らかになった。

(ア) 情緒的な気づき

- ① 出会う段階で生まれた情緒的な気づきが、繰り返し対象とかかわる活動のなかで度々表出されている。また、対象とのかかわりが深まるにつれて、様々な情緒的な気づきが生まれている。
- ② 出会う段階で生まれた情緒的な気づきをもとに、根気強く対象にかかわろうとしている姿がみられる。
- ③ 出会う段階や対象とのかかわる活動において生まれた情緒的な気づきのなかには、繰り返し対象とかかわっても、最後まで形成的な気づきに深まらなかったものもある。

(イ) 形成的な気づき

- ① 出会う段階や対象とのかかわりから生まれた情緒的な気づきが、形成的な気づきへと深まっている。
- ② 対象とかかわる活動のなかで、形成的な気づきが連鎖的に生まれている。
- ③ 発展的な気づきに深まらず、形成的な気づきのまま留まってしまった児童もある。

(ウ) 発展的な気づき

- ① 対象とのかかわりを繰り返すにつれて、形成的な気づきが発展的な気づきへと深まっている。
- ② 対象とのかかわりを繰り返すにつれて、発展的な気づきをもとにしながら新たな発展的な気づきが生まれている。

これらの三つの知的な気付きは段階をふんで深まっていることから、知的な気付きを深めるための構成要素である三つの意識も段階的に高まっていると考える。

以上のことから、児童は学習活動が自分にとってどんな意味や価値があるのかを考え、はたらきかけ、知的な気付きを深めているととらえる。

5 生活科における知的な気付きを深める学習指導の在り方に関する研究のまとめ

これまで、指導試案に基づく授業実践を行い、実践結果の分析と考察をとおしてその妥当性について検討してきた。そこで、生活科における知的な気付きを深める学習指導について「成果」と「課題」の2点についてまとめる。

(1) 成果

ア 交流し合う場のなかで自他の知的な気付きの違いを比較する活動により、児童は他の児童の知的な気付きのよさを自分のものとしながら対象とかかわり、その結果、知的な気付きを深めることに効果があることが認められた。

イ 交流し合う場のなかで自他の知的な気付きの共通点を関連づける活動により、児童は対象とかかわることによって生み出してきたこれまでの知的な気付きを結び付けながら、新たな知的な気付きを生み出すようになり、その結果、知的な気付きを深めることに効果があることが認められた。

ウ 交流し合う場のなかで対象への新たな課題をもたせる活動により、児童は自分の思いや願いをふくらませて対象とかかわるようになり、その結果、知的な気付きを深めることに効果があることが認められた。

(2) 課題

児童の知的な気付きを、個に応じた取り上げたり見通しをもたせたりできるような交流し合う場を工夫していく必要がある。

以上のことから、課題は残るものの「繰り返し対象とかかわる活動」を取り入れた指導試案の妥当性について見通しをもつことができた。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

この研究は、「繰り返し対象とかかわる活動」をとおして知的な気付きを深める学習指導の在り方を明らかにし、小学校生活科の学習指導の充実に役立てようとするものである。そのために、知的な気付きを深める学習指導の在り方についての基本構想に基づき、指導試案を作成し指導実践を行い、知的な気付きの深まりについて分析と考察を行った。その結果、仮説の有効性に見通しをもつことができた。

2 今後の課題

本研究を今後より生かすための改善点として次のようなことが考えられる。

- (1) 個々の児童の知的な気付きのよさを大切に、それを取り上げ、深めたり広げたりできるような交流し合う場の工夫を行う必要がある。
- (2) 第1学年の児童の意識の実態や、指導実践をとおしての意識の変容について調査する際には、児童の発達段階を十分に考慮する必要がある。

【主な参考文献】

嶋野道弘編著 「新しい教育課程と学習活動の実際 生活」 東洋館出版社 1999年